

私の夢 ～我が人生夢を追う ソデイカ漁発展に向けて～

喜界島漁業協同組合
倉橋 憲司

1 地域の概要

私の住む喜界島は鹿児島県本土から南へ約 380km, 奄美大島の東に位置し（図 1）、海岸線 48.6km, 面積 56.93 km²の隆起性珊瑚礁の島であり、現在も年間 2mm ずつ隆起を続けている。人口は 6,997 人, 世帯数は 3,277 世帯（平成 28 年現在）である。サトウキビを中心とした第一次産業が盛んな島で、特に白ゴマは日本一の生産量を誇っている。また、近年は長寿の島としても知られ、現在、世界最高齢で、歴代でも世界 7 番目の長寿である 117 歳の田島ナビさん（女性）が住んでおり、私の暮らす志戸桶（しとおけ）集落にも夫婦共に 100 歳を迎えた夫婦が暮らしている。さらに、他の島々と同様に景色が良い島であり、特に天気が良い日に百之台公園（ひゃくのだいこうえん）から眺める海や、小野津（おのつ）から見える奄美大島に沈む夕日は、喜界島を訪れる方々に一度は見て頂きたい風景である（写真 1）。



図 1 喜界島の位置



写真 1 喜界島の特徴

左上：航空写真 左下：世界最高齢田島ナビさん
右上：特産品の白ゴマ 右下：百之台公園からの景色

2 漁業の概要

喜界島漁業協同組合の組合員数（平成 28 年 12 月 31 日現在）は、141 名（正組合員 49 名, 准組合員 92 名 図 2）、漁業生産量は約 33 トン, 漁業生産額は約 2,500 万円（いずれも平成 28 年度島内出荷分 図 3）である。島外出荷量も含めると、平成 28 年度の漁業生産量は約 93 トン, 漁業生産額は約 6,700 万円

に及ぶ。主な漁業種類は瀬物・シビの一本釣り、サワラ曳縄等の漁船漁業、クルマエビやウミブドウの養殖等である。近年は私が行っているソデイカ旗流し漁（以下ソデイカ漁とする 写真2）の水揚げが増加しており、現在私を含め3名の漁業者がソデイカ漁を行っている。喜界島漁協では、対象魚種、漁法を問わず皆が毎日出漁しているのが特徴であり、おそらく他地域と比較しても漁業者の平均出漁日数は多いと自負している。この要因として、喜界島周辺に万遍なく瀬が点在しているため（図4）、時化の時でも風下側で操業が可能であることや、漁業者の水揚げ量増加に対する意識が高く、出漁に対して積極的であること等が挙げられる。

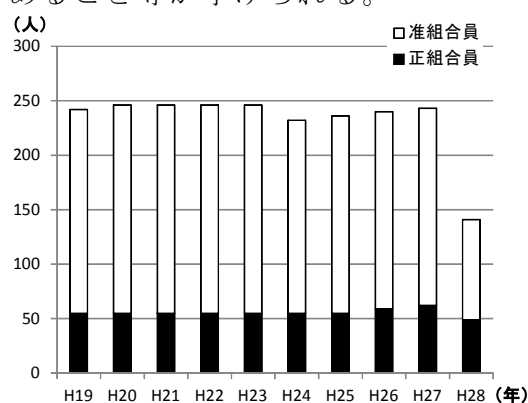


図2 組合員数の推移

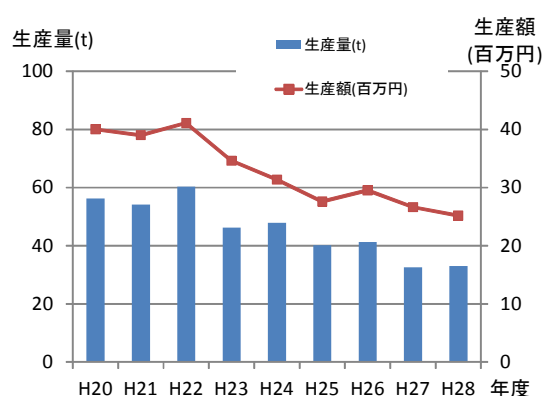


図3 漁業生産量・生産額

（島内出荷分）の推移

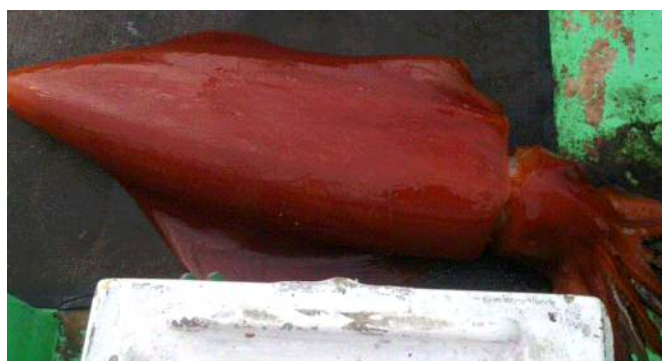


写真2 ソデイカ

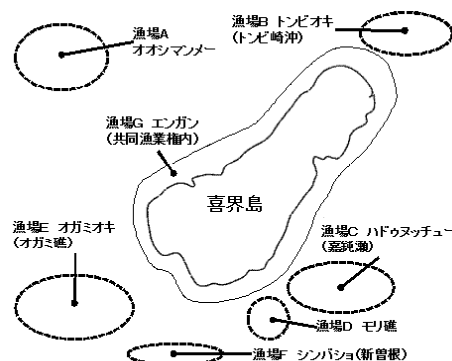


図4 喜界島周辺漁場図

（点線部に瀬が存在）

3 漁師、大相撲への夢

私は昭和 56 年 5 月 3 日、喜界島で漁師の息子として生まれた。幼い頃から魚釣りが好きで海への関心が高く、小学生の頃から父の船に乗せてもらい、実際に海へ出ていた。先輩漁師にもかわいがられ、漁業や漁師に強い関心を持つようになり、将来は漁師になりたいという夢ができた。これが私の最初の夢である。

海や漁業への関心と漁師へのあこがれの方で、私にはもう一つの夢があった。それは、相撲取りになる夢である。相撲との出会いは私が小学校 4 年生の

時の夏祭りの相撲大会であった。当時は大会の1ヶ月前から非常に厳しい練習があり、泣きながら行うこともあった。中学校では相撲部に入部し、2年生の時に団体戦で九州大会に出場、3年生の時に個人戦で九州3位となり、全国大会にも出場した。なお、3年生の九州大会での優勝者は、大相撲で活躍し、幕内経験もある奄美大島出身の里山力士である。

その後、鹿児島実業高校に進学し、相撲部に入部した。高校では監督の家での寮生活で、特に食事の面で苦勞した。毎食のご飯は丼3、4杯、おかずも残すことは許されなかった。

また、先輩後輩の上下関係が厳しく、先輩からのしごきがとても嫌であったことを今でも覚えている。しかし、頑張った甲斐あって、3年生時には団体戦は県内で無敗、全国大会でもベスト8まで進出した。

当時は高校卒業後、すぐ喜界島に戻り、漁師を始めようと考えていたが、相撲の実力を評価されて大学からスカウトがあったことや、父からも「大学まで行って相撲をやってみろ」と後押しがあったことから、立命館大学への進学を決めた。大学2年生の時、西日本学生相撲選抜大会で、立命館大学として初めての団体戦優勝を果たした（写真3）。この時が自分の相撲人生の中で最も充実した時期であった。当時はすぐにでも大学を辞めて大相撲へ入門し、関取を目指したいという夢を持っていたが、監督から「最後まで大学の相撲部にいてくれ」と頼まれ、実現できなかった。その後は体重が思ったように増えなかったこともあり、大相撲への夢は断念せざるを得なくなった。その後、



写真3 西日本学生相撲選抜大会優勝
（前列左端が私）

大学は4年時に中退し、1年

間は京都で働いていたが、幼い頃に思い描いた「漁師になりたい」という思いが再び強くなり、23歳で喜界島へ戻ってきた。それからは「漁師になる」という夢を叶えるために邁進することとし、24歳で父の下で漁業に着業した。父の船では、共に瀬物一本釣り等の操業を行った。この頃に奄美大島の漁師をはじめ、様々な先輩漁師と出会い、漁師として生活していくのに必要な技術や心構え等、多くのことを学んだ。その結果、自分でも色々と考えて漁を行うようになり、経験を重ねる毎に、父のやり方についても「もっとこうすれば」と感じるが多くなった。しかし、父には何十年も漁業を営んできた中で培ってきた自分自身の操業方法があり、それを簡単に変えることはできない。次第に意見の食い違い等が多くなり、私自身も独立して自分自身の考えや方法で漁

業を営みたいと思うようになった。そして、着業してから3年後の27歳の時、自分の船を購入し、ついに一人前の漁師として独立を果たした。

私がこれまでに見た夢の2つのうち、「漁師」の夢は叶い、「大相撲」の関取の夢は残念ながら叶わなかった。しかし、大相撲の夢に向かって相撲に明け暮れていた日々の中で培ったものは、現在も漁師としての私の心底に深く根付いている。相撲を通して学んだ挨拶・礼儀・忍耐は、漁師として働くようになった今も常に忘れることなく実践している。私が考える相撲と漁業との共通点は、「頑張れば頑張った分だけ結果が出る」ということである。これは常々父から言われていた、「海は自分が頑張った分だけ自分に返ってくる。だから、時化している時も海に出ろ、何があっても漁を休むな。そうすれば潮の流れ、魚の付き等海が教えてくれる」という言葉と同じだと考える。実際、群島内や沖縄等、様々な港へ行くが、いずれの港でも優秀な漁業者は休まず漁に出ており、忍耐強いので、全くそのとおりだと感じている。

4 ソデイカ旗流し漁開始・技術向上

漁師として独立した当初は瀬物一本釣りや、パヤオと呼ばれる浮魚礁を利用したサワラ曳縄等を中心に行っていた。その頃、時化の時などに喜界島に避難してきた沖縄の漁業者から、ソデイカ漁が大きな利益を上げられること、沖縄の漁業者が私の住む喜界島近海でも操業していると聞いたことから、私もソデイカ漁をやってみたいと思うようになった。



写真4 ソデイカ漁使用船

丁度その頃、当時操業していた船より大型で、ソデイカ漁に使用するのに適した船（写真4）が売りに出されているという話を枕崎の漁業者から教えてもらった。そこで、その船を父と共に目で見て確認し、実際にソデイカ漁への使用に適していると判断したうえで購入、平成24年、私が31歳の時にソデイカ漁を開始した。現在もこの船でソデイカ漁を営んでいる。

実際にソデイカ漁を開始したのは、船を購入後の5月であり、操業できたのは漁期終了（6月）までの2ヶ月間であった。この2ヶ月間の操業は思ったよりうまくいかず、操業技術が未熟で、漁具も適切なものでなかったこともあり、1日あたり1桁台の漁獲尾数であった。

この年の11月（次の漁期）、沖縄県でソデイカ漁を行っていた漁師と親しくなり、共に沖縄でソデイカ漁をしようと誘われたことから、沖縄へ行った。こ

の年は彼が所属する 3～4 名のグループの方々からソデイカ漁に関するノウハウ（漁具の作り方等）を色々と教わり、操業もそのグループと共に出漁した。グループでの出漁は、単独の出漁と比較して漁場探索が行いやすい等、様々な利点がある。しかし、グループでの最初の操業は、同じ漁場であるにも関わらず、他メンバーの 10 分の 1 しか漁獲を揚げられなかった。グループの方々からは漁具の違いについて指導を受け、漁具は経費がかかるので徐々に揃え、他のメンバーが使用している漁具に近づけていけばいいと教えられた。しかし、少しでも早く漁獲を揚げられるようにするため、多額の出費があったが、3 回目の出漁では漁具を全て一新した。グループの方からは、皆が 40 本釣る時に 41 本、42 本釣れるように考えて漁具を作るよう指導され、今も常にそう考えて時間、労力及び資金をつぎ込み漁具を作製している（1 回あたりの差は僅かだが、シーズンを通して考えると大きな差になり、つぎ込んだ努力量に見合うだけの成果を得られる）。この年に、漁具のことを含めソデイカ漁に関する様々なことを学ぶことができ、それ以降は常に安定した漁獲を揚げられるようになった。

現在、私の全体の水揚げ高はソデイカ漁が 8 割以上を占めており、ソデイカ漁を開始する前の 2 倍以上となっている。また、私が漁獲したソデイカを妻や姉等が加工販売するようになり、雇用の拡大や収入増加にもつながっている。さらに、沖縄や奄美群島内の優秀なソデイカ漁師と新たに関わりを持ち、より有意義な情報交換を行えるようになった他、連携が深まることで周辺の漁業者と漁場の相互利用が行えるようになり、大きなトラブルもなく安全な操業が行えるようになった。

このように、ソデイカ漁の開始は私の漁師人生の中で大きな転機となっただけでなく、関係者にも様々なメリットをもたらしていると考えている。

5 ソデイカ漁の概要

ソデイカ漁は毎年 11 月から解禁となり、翌年 6 月まで操業が認められているため、その時期は常にソデイカ漁を行っている（ソデイカ漁のシーズン外は、シビ釣りや、サワラ曳縄等を行っている 図 5）。

ソデイカ漁の操業期間は、沖縄への出荷を目的とする場合は 2 週間、喜界島への出荷を目的とする場合は 1 週間程度と長期に及ぶ。漁場は、当日の海面高度や潮の流れ等を見て判断している。

操業の流れは、まず、毎朝 4 時半から無線による交信が始まる

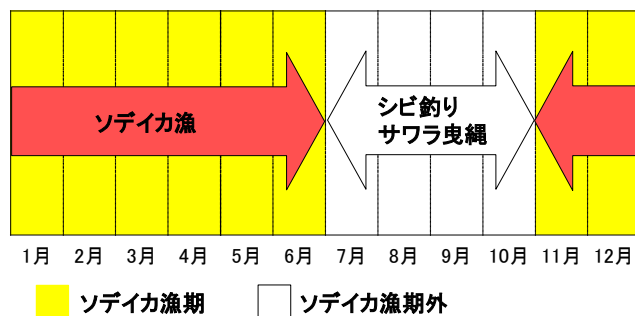


図 5 1 年の流れ

ので、それを行った後、5時から投縄を開始する。投縄は、深さ 500 m 以上にもなる 4 つの餌木（おっぱい）がついた仕掛け（写真 5，6）を合計 40 本，約 10 マイルにわたって展開する（写真 7）。投縄は 7 時半頃に終了。その後 12 時頃まで休憩し，揚縄作業に入る。揚縄はワイヤーのみ巻き上げ機を用いて巻き上げ，その他は手で回収する。イカが掛かっていれば外し，締め，その漁具をたたみ，次の漁具を巻き上げている間にイカを解体する。全ての仕掛けを揚げ終わるまでその作業を繰り返すため，合計約 10 時間連続での作業となる。揚縄終了後，周辺の漁業者と，無線で翌日の位置決めを行い，全て終わるのは午後 11 時頃となる。

慣れないころは翌日の午前 2 時まで作業が続いたこともあった。なお，揚縄がどれほど遅くなった場合でも，翌日 4 時半

には必ず無線による交信を行い，5時から新たな投縄の作業を開始する。これを洋上にいる間は毎日，全て 1 人でこなすので，想像を絶するハードな作業である（図 6）。

また，地味な作業であるが，漁具の手入れが非常に重要で，この良し悪しにより漁獲量が決まると言っても過言ではない。「おっぱい」と呼ばれる餌木（写真 6）は，少しでもザラついた部分があると，イカが警戒して食いつかなくなってしまうので，炙ってザラつきをなくす。また，「パンツ」と呼ばれる，おっぱいの外に巻く布も，破れたりしわがあるとイカが食いつかないので，綺麗な状態のものに取り替える。さらに，イカを引っかける針も，曲がりがあるとイカがうまく引っかからず抜けてしまうため，常に手入れが欠かせない。これら漁具の状態の差は漁獲量の差に直結するため，複数のメンバーで同時に出漁した時に自分だけ漁獲が少ない状況だと，漁具の

翌日の位置決め

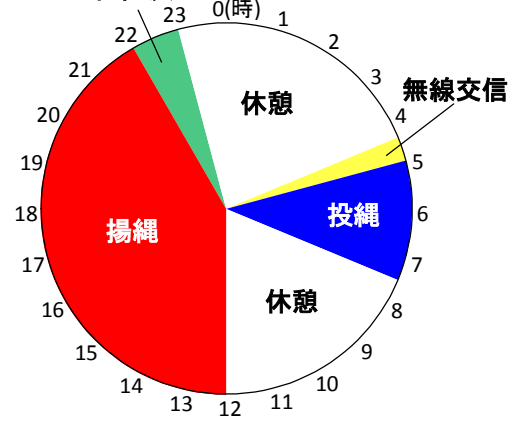


図 6 一日の流れ



写真 5 漁具（上部）

写真 6 漁具（下部）

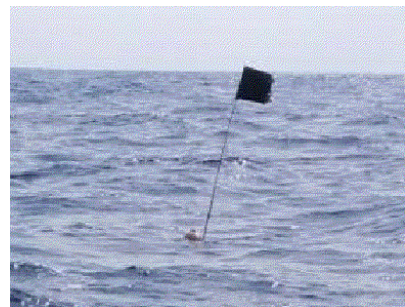


写真 7 漁具投入

手入れが不十分であることが明白になってしまう。従って、漁具の手入れはどれだけ時間をかけても完璧に行うように努めることが不可欠であり、この作業は想像以上に大変なものであるが、その作業を継続して行える者のみがソデイカ漁を行う資格がある者と言えるだろう。

現在、沖縄に水揚げする場合、頭部（ゲソ）は魚倉の保管スペースに限りがあることから廃棄し、身のみ水氷保存する。沖縄では糸満漁港に水揚げしており、取引先の業者に直接販売している。喜界島へ水揚げする場合は、鹿児島県漁業協同組合連合会へ出荷している。母が加工販売するので頭部も水揚げするが、身と頭部と一緒に水氷保存すると身に臭いがつき商品価値が低下するため、身と頭部は必ず分けて保管している。

ソデイカ漁は非常に多くの経費がかかる。ソデイカの水揚げによる収入を100%とした場合、燃料代が20%、道具代が10%、氷代が6%、食費が5%という割合で経費が発生し、合計すると水揚げ高の約4割は経費のために費やされる（図7）。しかし、それだけの経費をかけても、収入効率は他の漁業と比較してとても高く、魅力的であると感じている。

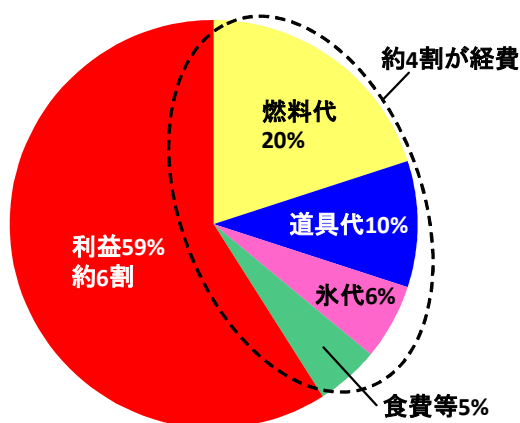


図7 経費の割合

6 これからの私の夢

私は漁業が好きであると同時に、喜界島のことも心から好きである。喜界島のソデイカ漁をはじめとした漁業はもちろん、島全体の活性化を目指して邁進していきたいという夢を持っている。そのためには喜界島漁業協同組合青年部活動や地域の集落活動を積極的に行っていきたい。

しかし、現在、当漁協青年部の活動はほとんど行われていない状況にある。そこで、青年部の活動を活発化させ、喜界島での魚食普及に向けた活動を行おうと考えている。私は、奄美群島の各漁協青年部の集合体である奄美群島水産青年協議会が主催する、奄美市内の児童養護施設での魚食普及活動に参加した際、魚捌き体験等をしている時の子供達の非常に興味津々な様子や、刺身をおいしそうに食べる様子などを見て、ぜひ喜界島でもこのような活動を行い、子供達に様々な感動を与えられるように尽力したいと思った。その為にまず、子供達に魚への関心を持ってもらえるよう、地元の小学校、幼稚園等へ働きかけ、私が夏場のシビ釣りで獲った魚を利用した解体ショーを来年には必ず実施したいと考えている。そして、それが結果として保護者、先生方等へと広がり、より多くの方々に魚への関心を持ってもらうとともに、将来漁師を目指す子供達が一人でも多くなることに繋がるよう尽力していきたい。同時に、喜界島が良

い漁場に恵まれていることを活かし、青年部全員が魚の締め方、扱い方等についてさらに勉強し、喜界島の漁業生産物をより良い状態で出荷、販売していきたいと考えている。

また、私は地元、志戸桶集落の青年団長も務めている。青年団は集落を盛り上げるため、盆祭りの開催等（写真8）の活動をしている。台風による被害等に対しては、青年団のメンバーがいち早く駆けつけ、その対処に当たっている。こうしたことは、全て喜界島が好きで、地元を大事にしたいという気持ちで活動しているものであり、これからも継続して行っていきたい。



写真8 集落の盆祭り

最後に、現在の私の最も大きな夢は、漁業、特にソデイカ漁の後継者育成である。ソデイカ漁は前記のとおり非常にハードな漁業であるが、努力次第で大きな利益を上げられるものであるため、とても魅力的な漁業だと感じている。特に若手漁業者にとっては、ソデイカ漁をマスターすれば他の漁業と比較して安定した漁業経営が行えるため、ぜひ仲間を増やしたいと考えている。これまで、機会がある度に仲間とともにソデイカ漁の魅力について話をしたり、漁具の相談に乗ってきた結果、今年度漁期より新規就業者の1名がソデイカ漁を開始し、水揚げも着実に向上している。その他にも4名の希望者がいるので、自分の船に乗せ、私が最初に漁具のことで色々と苦労した経験を踏まえた指導を行い、ソデイカ漁師を多く育てたいと考えている。特に、適切な漁具を揃え、常に完璧に手入れを行うことの重要性については力を入れて指導したい。これにより、喜界島の漁業者によるソデイカの水揚げ向上、さらには喜界島の漁業生産量全体の底上げに繋がり、同時に喜界島において将来的にソデイカ漁が継続して行われていくことで、女性グループによるソデイカの加工品開発や、新たな担い手の参入等、島全体の活性化に繋がると考えられる。

私はこれまで常に「夢」を持ち、それを叶えるため全力で取り組んできた。これからも「夢」を持ち続け、それを叶えるためどのようなことにも「挨拶・礼儀・忍耐」を忘れずに全力で取り組んでいきたい。